

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530693

研究課題名（和文）臨床心理士養成大学院の現職教員及び社会人院生の現状と資格取得後の活用について

研究課題名（英文） The current situation of graduate students with full-time jobs including school teachers who belong to graduate schools for training clinical psychologists and their subsequent employment after obtaining the certification for clinical psychologists.

研究代表者

中川 美保子（NAKAGAWA MIHOKO）

愛知教育大学・教育学研究科・教授

研究者番号：60402640

研究成果の概要（和文）：本研究は臨床心理士資格取得をめざす現職教員や社会人が有意義な大学院での学びを獲得し、資格を有効に活用するための養成大学院の在り方について研究した。資料による養成大学院の現状分析と在院生、修了生へのアンケートの結果から、現職教員や社会人は、資格取得後、スクールカウンセラーなどの教育分野や児童養護施設での心理士など臨床福祉分野での活動を目指す傾向があるので、それらの領域のカリキュラムの充実が急務であることが示された。

研究成果の概要（英文）Abstract： The purpose of this study is to explore the current situation of graduate students with full-time jobs including school teachers who aim to obtain certification for clinical psychologists and analyze their choice of employment after obtaining the certification.

The result is as follows. Graduate students with full-time jobs including school teachers have a tendency to look for jobs in the field of education and welfare after obtaining the certification. Therefore, it is more important to improve the curriculum regarding fields of education and welfare than other fields in graduate schools for training clinical psychologists.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：教育臨床心理学

科研費の分科・細目：4001

キーワード：大学院、臨床心理士、現職教員、社会人、資格

## 1. 研究開始当初の背景

1974年に制定された大学院設置基準によって、大学院が担う役割に「研究者養成」、「高度専門職職業人の養成」が加えられて以来、緩やかではあるが社会人の大学院進学率が増加するようになった。とりわけ1990年代以降は、「自分探し」「生き方の模索」などをキーワードとして、社会人や専業主婦たちの間で、学びに対する「再チャレンジ」が語られるようになっていった。またバブル経済崩壊後、従来の年功序列型の雇用形態が瓦解しはじめ、それに代わって「資格」が注目されるようになってきた。この現象も大学院への社会人や家庭人の入学志願者の増加に拍車をかけることとなったように思われる。このように現在では、大学院に多数の社会人が、自らの職業的能力の向上や資格取得、あるいはより高い教養人となることを目指して在学している。このような状況下で特に注目されているのが、臨床心理士養成のための養成指定大学院の発展であろう。この制度は1998年度開校の14大学院と1999年度開校の5大学院の計19大学院を対象として開始され、この10数年の間に160あまりの大学院が指定を受けるに至っている。そしてこれらの大学院のほとんどは社会人にも門戸を開いている。そのため、現在では社会人にとって非常に魅力的な学びの場として大きな意義を持った進学先となっている。加えて臨床心理士の業務としてスクールカウンセラーの活躍が広く社会的に認知されているため、これらの大学院への現職教員の志望も急増している。これらの社会人や現職教員の中には、修了後、それまでの仕事を続けながら大学院で獲得した臨床心理学の専門性を発揮できる業務に携わっている人、臨床心理士資格を生かして転職する人、あるいは専業主婦から就職を果たした人もいる。

しかしながら全体として考えるならば、彼らの修了後の進路は個人に任されたものであり、制度として保証されているわけではない。あるいは働きながら大学院生として勉学する際の特別なカリキュラム設定、学習環境の整備などの条件が整っているわけでもない。おそらく現状では、学部から直接進学してくる学生たちと同じ条件の下で、仕事と大学院での勉学を両立さ

せているのではないだろうか。

これまで生涯学習についての研究はさまざまに為されているが、臨床心理士養成指定大学院での「現職教員及び社会人の大学院生」の増加はここ数年の現象であり、このような人たちに対する大学院の在り方や在籍学生の実態、修了後の進路についての研究はほとんどなされていないのが、本研究を始めるに至った背景である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は

- (1)まず、近年増加している「臨床心理士をめざす現職教員や社会人」に対する大学院教育の現状と、彼らが求めている大学院での学びについて明らかにすることである。
- (2)次に彼ら現職教員や社会人が大学院終了後に、臨床心理士資格をどのように活用しているかを調査し、より意味のある活用方法を探求することである。

これらの結果から、彼らがそれまで就業していた職業や社会人としての経験を通して培ってきた専門性を無効とすることなく、その力量を臨床心理学分野で活用するための大学院教育のあり方を考え、彼らの専門性ののぞましい活用について提言することである。

## 3. 研究の方法

(1) 臨床心理士養成大学院あるいはそれ以外の進路から臨床心理士資格を取得し、現在スクールカウンセラーとして活動している人たちへの聞き取り調査を実施し、大学院での学びの振り返りにより、現状での成果や改善点についてまとめる。

(2) 社会人でありかつ養成大学院で学習して大学院を修了した臨床心理士から、現在の職業やその活動内容についての報告を受け、それを参考にして養成大学院に求められることについて、研究会で討議し、結果をまとめる。

(3) 臨床心理士養成大学院に在籍している大学院生に対して、入学前、現在、修了後の進路などについて、質問紙調査を実施する。対象は養成大学院160校に在籍する任意の各20名の院生とする。

## 4. 研究成果

上記の(1)~(3)について、それぞれの成果をまとめた。

(1) SCへの聞き取りからSC活動の実践を振り返った結果、SC自身は、彼らの出身の大

学や大学院の学習から独自の専門性を認識していることがわかった。しかしそれに加えて、大学院修了後の実際の体験が専門性をより高めていることも多く語られた。たとえば、学校で SC が感じる問題点は、実際にその学校で会うクライアントとの間で生じる転移・逆転移現象や派遣校の教職員の SC 活動への抵抗であり、それは対象の学校によって独自のもので考えられる。したがって、大学院での学びが基礎的な部分で SC 活動を下支えているものの、派遣された学校の実情とのすり合わせによって、理論的なだけでなく実践に応用できるような専門性が身につけてくると言うのが聞き取りからの実感であった。加えて、実際に現場で抱える問題こそが、SC 活動の幅を広げるきっかけともなるのであり、「危機こそ転機」という発想によって活動を見直し修正する SC もいることがわかった。また個人臨床でクライアントの意思を尊重するように、学校臨床でも、学校が触れてほしくないと思っている部分を無理に顕わにするのではなく、学校の力を信じてその自主性を見守るのも同様に大学院での学びから応用できる部分と言えよう。本研究でインタビューした SC たちが、その活動を《つなぐこと》《見立てること》《子どもたちのために》というような概念で答えていることから、SC 活動は個人臨床でのカウンセリング活動と相似的と考えられるようなあくまで「過程的」活動であり、「学校の諸問題を解決する」というような目的的な活動ではないことが明らかとなった。つまり SC 活動の中心は、問題を解決することではなく、学校が問題を解決するための援助の過程であるといえるだろう。

さらに、臨床心理学でよく言われるカウンセラーの二律背反性についても、この面接調査で SC にも当てはまることがわかり、大学

院での学びの生きた実践の場として SC 活動が行われていることがわかった。したがって、養成大学院で学んで SC となった場合、派遣校での活動で問題を抱え困難に陥ったときは、養成大学院での学びに立ち帰ることが肝要であり、そのような理論的な背景を持つことによって諸問題の解決の糸口をつかむことが可能性があると言えるだろう。

これらを踏まえ、養成大学院に入学する学生たちの入学動機が、修了後、SC など教育臨床分野での就業を目指すものである場合、大学院教育においては、学校に関する知識や学校臨床において有効と考えられるような技法・理論の習得のみならず、臨床心理学全般についての基礎からやや高度な知識に至るまでの幅広い学びが求められることが明らかとなった。加えて、臨床心理学の専門性を学校臨床分野で生かす訓練として、学校臨床実習を行うことは必須であることも調査結果から明確となった。

(2) 社会人院生として養成大学院に進学し、臨床心理士を志す場合に受けた支援として自らのそれまでの職業的なアイデンティティと入学後のそれとのすりあわせが必要であることが示唆された。これには、本人の意識の問題だけでなく、他の院生との関係性も大きな影響を持っているといえる。

まず本人の問題を考えると、学部で臨床心理学を学び大学院に入学している直進院生に対しての学問的なコンプレックスの克服と自らの臨床心理的な専門性に関わるアイデンティティの確立にいかに取り組めるかが重要になってくる。ここではそれまでの自身の経験を即座に否定したり、棚上げにするのではなく、それらの活用の方法を検討したり、その経験と入学後の経験を連続的にとらえることも必要となってくる。

次に周囲の人たちとの関係や彼らからの援助を考えると、指導者である大学教員の社会人院生への配慮がまず望まれる。彼らのそれまでの社会人経験を肯定的に評価し、臨床心理学の理論の習得を積極的に促進するような指導・支援が求められよう。

さらに社会人経験が養成大学院修了後に活かされるためには、本人が経験の質を高めるように研鑽を積むことも忘れてはならない。それは入学前の社会人経験について、総括し何が臨床心理士として生かされるのか、何が留意点なのかを内省することの必要性としてあげられよう。また、大学院在籍の経験をそれ以前の経験と対比し、たとえば教師としての考え方と臨床心理士としての考え方の相違について意識的に模索し続けるなどの努力が必要であるだろう。

資格取得後には、社会人経験のある臨床心理士というアイデンティティの確立のために、専門性が他の直進学生よりも劣るのではないかという理論的な基盤の弱さを克服するための継続的な研修による研鑽が望まれよう。さらに臨床心理士としての活動の場で「社会人や教師経験者だから、臨床心理の専門性はやや弱いのではないかと危惧されること」について、継続的なスーパービジョンを受けるなど、それらの見解を引き受ける適切に対応する力量を身につけることも求められるだろう。

(3) 臨床心理士養成大学院（以下、「養成大学院」と略記）の現状をまとめ、その課題を探求することによって養成大学院の更なる充実や進路選択に寄与することを目的として、養成大学院に学ぶ大学院生を対象に、大学院の教育と修了後の進路などについての意識調査を実施した。以下に調査の方法と結果を述べ、結果の考察を行うこととする。

#### 調査対象

全国の養成大学院に在籍する大学院生（調査回収者 585 名）。

#### 調査内容

最初に「性別」、「年齢」に加えて、「養成大学院の種類（1種、2種、専門職）」、「大学院入学前の立場（1. 大学生(心理専攻)、2. 大学生(心理以外専攻)、3. 社会人、4. その他）」について尋ねた。次に、以下のような尺度を作成した。

1. 「入学の動機」
2. 「実際の活動への感想」
3. 「授業の有効性」
4. 「期待する授業内容」
5. 「期待する授業(職域別)」
6. 「将来希望する職域」
7. 「将来希望する対象年代」

#### 調査手続き

2008年10月、全国の養成大学院に郵送し、同意の得られた養成大学院の大学院生によって実施され、返送された。

#### 結果と考察

ア. 回答した養成大学院に学ぶ大学院生の「性別」は、女性が4分の3ほどを占めており、臨床心理士の一般的な性別の傾向とほぼ同一であった。回答者の「年齢」は、20歳代が80%近くを占めており、年代の中心は20歳代であった。

しかし、回答者の「入学以前の立場」を見ると、社会人が25%、心理以外を専攻していた大学生が6.8%存在しており、年齢構成以上に多様な学歴や経歴を有する学生が入学していた。「社会人入学者の入学以前の具体的な立場」を見ると、教育関係者が35%（内訳は、教員16.7%と教員以外18.2%）と、もっとも多い。このことから、社会人入学者の中で入学へのもっとも強いニーズをもっているのは教育関係者であった。

イ. 回答者が考える将来役に立つ「授業の有

効性」で、もっとも高く評価されたのは「臨床心理実習」であった。また、この「臨床心理実習」と関連の深い科目である「臨床心理基礎実習」が3番目に評価されていた。これらの結果から、実践的な実地教育が不可欠であることを回答者は強く実感していることが明らかとなった。また、「心理療法」や「査定」や「投影法」に関する科目も高い評価を受けていた。さらには「精神医学」に関する科目も、将来役立つ授業として大学院生の目に映っていた。

ウ. 今後より拡充を望む「期待する授業内容」は、「職業関連」、「臨床実践」>「専門理論」の順であった。この結果からも、回答者の主要な授業ニーズは、将来の職業選択に備えた実践的な内容の充実であることが明らかになった。さらに「職業関連」の授業の中で、具体的に「期待する職域」は、「医療」>「教育」>「福祉」>「司法矯正」>「産業」の順であった。

エ. 「将来、希望する職域」は、「医療」>「教育」>「福祉」>「司法矯正」、「産業」>「私設相談(開業)」の順であった。この結果は、実際の臨床心理士の職域の分布にほぼ対応していた。またこの結果は、上述した「期待する授業内容」の結果ともほぼ対応しており、回答した大学院生は、臨床心理士の現状と将来の自らの職業選択を考慮しながら、授業の拡充を期待していると考えられる。また、将来の職業に関連して「希望する対象年代」は、「青年期まで」>「成人期」>「老年期」の順であった。

以上から、回答者は「医療」、「教育」、「福祉」、「司法矯正」、「産業」、「私設相談(開業)」の順で仕事を希望し、かつ対象年代としては青年期までをより望んでいることが明らかとなった。中高年の自殺の増加、高齢者の増加などの社会の現状を考える

とき、修了後の職域の拡大のためには、大学院生の関心が成人や高齢者に向かうような教育や指導の体制が、養成大学院にはより一層求められるであろう。

オ. 「入学の動機」は、「学問・職業的関心」>「学習経験・親近感」>「生き方・進路意識」>「実利・受動的理由」の順であった。

「学問・職業的関心」がもっとも高いことから、養成大学院に入学してくる学生は、専門分野に魅力を感じ、この分野の実践家として身を立てていきたい前向きな気持ちを持って入学する傾向にあると考えられる。

「実際の活動への感想」では、「就職不安」>「学業不安」>「モラトリアム傾向」>「研究者志向」の順であった。これらの結果からは、実践家としての就職への不安と予想以上の授業のハードさを感じながら、日々の活動に取り組んでいる大学院生の姿が浮かび上がってくる。養成大学院側には、出口(就職)の拡大に向けた取り組みと、学業へのサポートが求められていると言えよう。学業へのサポートとして、何らかの形で大学院修了者への継続的な教育訓練を行っていくことも必要かもしれない。

カ. 入学前に心理学を専攻した者の特徴は、「入学の動機」に関して、「学問・職業的関心」というより積極的な動機と、「学習経験・親近感」や「実利・受動的理由」という比較的消極的な動機が高い点であった。この大きく異なる動機がともに高いこと、すなわち積極的な動機で入学する者と比較的安易な理由で入学する者が混在していることが、彼らの特徴であった。また「実際の活動への感想」でも、「モラトリアム傾向」と「就職不安」という、かなり異なる感じ方がともに強い傾向が認められた。さらに、彼らの「入学の動機」と「実際の活動への感想」の関連では、消極的な入学動機の高い者は日々の活動に

関して「モラトリアム傾向」を抱きやすく、逆に積極的な動機で入学してきた者はより強い「就職不安」を感じている傾向が認められた。

キ.学部で心理学以外を専攻していた者では、他の立場の入学生に比べて、それほど明確な特徴が見あたらなかった。本調査からは、彼らの「入学の動機」や「実際の活動への感想」の特徴を明らかにすることはできなかった。

ク.社会人入学者の特徴は、「入学の動機」として「生き方・進路意識」が他の立場に比べ高い傾向であった。また「実際の活動への感想」としては、「研究者志向」が強くなる傾向が認められた。彼らの多くは仕事をしながら、もしくは仕事を辞めて入学してきている。学部からストレートに入学した学生と異なり社会経験は豊富であり、さらに年齢も高く、ストレートマスター以上に明確な目的意識を持って入学し、次のステップを具体的に考えている可能性が高い。このような傾向が、「生き方・進路意識」の高さや「研究者志向」の強さと結びついていると推測される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

報告書；臨床心理士養成大学院の現職教員及び社会人院生の現状と資格取得後の活用について

<http://hdl.handle.net/10424/2990>

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

中川 美保子 (NAKAGAWA MIHOKO)  
愛知教育大学・教育学研究科・教授  
研究者番号：60402640

##### (3)連携研究者

本間 友巳 (HONMA TOMOMI)  
京都教育大学・教育学部・教授  
研究者番号：20324717

##### (4)研究協力者

加藤 佐敏 (KATOU SATOSI)  
元石川県精神保健福祉センター長，精神科医  
宮崎 祐子 (MIYAZAKI YUKO)  
石川県立金沢錦丘中学校教諭  
石川 憲雄 (ISHIKAWA NORIO)  
三重県スクールカウンセラー  
畑 陽子 (HATA YOKO)  
三重県スクールカウンセラー  
松井 なつき (MATUI NATUKI)  
愛知教育大学学校教育臨床専攻  
有馬 正道 (ARIMA MASAMITI)  
愛知教育大学学校教育臨床専攻  
今村 友美 (IMAMURA TOMOMI)  
愛知教育大学学校教育臨床専攻  
可児 真希子 (KANI MAKIKO)  
愛知教育大学学校教育臨床専攻  
小岩井 直 (KOIWA NAO)  
愛知教育大学学校教育臨床専攻  
戸塚 あかり (TODUKA AKARI)  
愛知教育大学学校教育臨床専攻